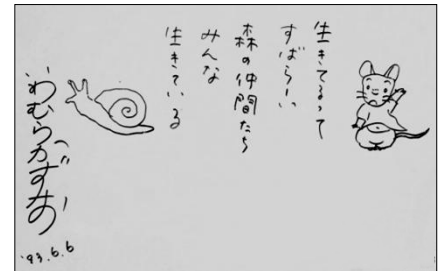


# 子の歳に、ニホンリスを想う

子にあてられた鼠は十二支で唯一、齧歯目（ネズミ目）の動物です。齧歯目は現生哺乳類で最も種類が多く、ネズミ科、リス科、ヤマアラシ科などに大別されています。日本列島に生息するのは、ネズミ科、リス科、ヤマネ科でしたが、野生化して大問題のヌートリアによってヌートリア科が増えてしまいました。それでは、本州（四国、九州を含む）に暮らすネズミ科、リス科、ヤマネ科たちを見てみましょう。

ネズミ科では、野ネズミのヤチネズミ、スミスネズミ、ニホンハタネズミ、アカネズミ、ヒメネズミが固有種です。アカネズミやヒメネズミは北海道や対馬、屋久島、種子島、隠岐などにも生息しています。絵本「14ひきのシリーズ」（いわむらかずお著）のモデルは、ヒメネズミだとお聞きしました。西日本に暮らす日本最小の野ネズミ・カヤネズミは、ユーラシア大陸にも広く分布するものです。

人の周囲に棲む一群は家ネズミと呼ばれます。アルビノが実験動物として知られるハツカネズミ、大型のクマネズミ、ドブネズミの3種類でどれも「史前帰化種」とされます。全国的に生息しています。



いわむらかずお氏の色紙  
森のセンター開館記念にて 1993.6.6

そして、今年にこそ想いを馳せたいのが、リス科の仲間たちです。

本州の固有種ニホンリス（ホンドリス）は、場所によって絶滅、絶滅危惧種になってしまいました（九州、淡路島、広島県で絶滅か）。かつて、リスは毛皮用や食用にされた狩猟獣でした。減少してきたと狩猟が禁止されたのは1994年です。減少の要因には森の変貌もあったことでしょう。それに加えて外来種の影響も懸念されているのです。



雪の上を駆けるニホンリス  
開田高原にて 2019.12.27

その一つ、キタリスはエゾリスの仲間です。ペットとしてロシアやヨーロッパから輸入されていたもの。病原菌の媒介やニホンリスとの交雑のおそれから2006年に特定外来生物に指定され、輸入も販売も飼育も禁止されました。しかし、今もエゾリスとして扱われている場合があり、注意が必要とされます。

そして、タイワンリス（クリハラリス）です。台湾や中国南部、マレー半島などに広く分布するリスで、やはりペットとして輸入されただけでなく、観光用に故意に放たれたところもあったようです。既に、神奈川県はじめ東京、埼玉、静岡、岐阜、大阪、兵庫、和歌山、長崎、大分、熊本、伊豆大島などに定着し、ニホンリスへの圧迫だけでなく、卵を食べることから野鳥への脅威、植生への影響、農作物被害などが懸念されています。2005年に特定外来生物に指定され捕獲もされていますが、追いつかないようです。

リス科に含むこともあるヤマネ科のニホンヤマネも固有種で、天然記念物に指定され、保護の対象となっています。小さなからだでも冬眠をし、気温が十分に下がらないとうまく冬を越せないため、これからがより心配されています。

ずっと昔から森にいたリスやヤマネたちが、ほんの最近になって危機に立たされてしまったことに驚きを禁じ得ません。

大文字山からお寺の森ではしばしばニホンリスたちに合えますが、ときには巣ごと落下したものを目にしたり、境内に迷子のように子どもが出てきたり、降りかかってくるアクシデントに、自然界の厳しさが伝わってきます。お寺の森のリス科のムササビたちが変わらず健在なのは、夜行性であることも幸いしているのでしょうか。

とにかく人は罪滅ぼしをしなくてはなりません。齧歯目たちをもっと身近に感じてネズミの目でもリスの目でも森を見渡し、人の力を尽くして、もともとの住人たちが暮らし続けられる自然環境を取り戻していかなければならないのだと思います。



巣ごと落下した赤ちゃん  
境内にて 2014.9.26



森の子クラブでもリスを発見  
大文字川沿いにて 2019.11.9



迷子の子リス  
境内にて 2017.10.28